熱田台地北部東側縁の縄文晩期遺跡の分布について

和　田　英　雄

1. はじめに

名古屋の熱田台地北部東側縁（名古屋市中区上前津・富士見町一帯）からは、昭和40年3月から開始された名古屋市地下鉄開通工事や、その後の都市再開発工事によって広範囲にわたり遺跡が発見され、縄文晩期の土器や石器も出土している。名古屋市遺跡分布図にも、この台地縁に位置する春日町遺跡（弥生後期）から大洞式土器が出土したと記載されている。

この春日町遺跡は、昭和38年12月に筆者が発見し、故吉田富夫氏のご指導により調査したもので、出土遺物を保管しているが、その遺物の中には大洞式土器はない。どうも分布図の誤りのようである。

聞くところによると、最近名古屋市は、嘱託職員・アルバイト（大学生）で遺跡分布調査を行っているが、正しい分布図を作成するためにも、自発的に遺跡を踏査して観察しつづけている者たちも参加させるべきではないだろうか。

名古屋考古学会会員は遺跡分布調査者である。名古屋考古学会会報「古代人」は正確な遺跡分布図でもある。私も「古代人」に遺跡の正しい位置と遺物の様相について記することとした。

2. 遺跡発見の経緯と遺物出土状態

標高10mの台地縁で東側に沖積地を望む一つの地形内からは、これまで知られているだけでも20地点にわたり縄文時代から歴史時代に至る遺物が出土している。そのうち縄文土器が出土したのは第1図に示した下前津遺跡1・2・3・7の4地点であるが、第3地点については、すでに名古屋考古学会会報No.15や、名古屋市中区古沢町遺跡発掘調査報告書1・縄文時代編に発表したので省略し、本項では1・2・7の3地点について述べることとする。

第1地点は昭和40年10月1日、名古屋市の地下鉄工事中に発見したものであり、この地点で土留杭を打込むため、幅1m深さ90cmの溝を掘ったところ、弥生中期（貝田町期）の土器とともに5片の縄文晩期土器片が出土した。

第1図　下前津遺跡縄文晩期土器分布図　（1／1.6万）

第２地点は昭和41年3月4日、名古屋市の地下鉄工事の土取り中に、幅10㎝前後の弥生後期の混土貝層を発見し調査したものである。貝層中の土器は高蔵期であり、貝層下黒土層の土器は貝田町期であるが、この貝層下黒土層から一片の縄文晩期土器が出土した。

1・2の地点から出土した弥生時代の土器については、拙著シリーズ名古屋市中区の弥生文化遺跡Ⅱで発表する予定である。

第7地点は名古屋市地下鉄工事中に発見したもので標高10ｍの台地上にある。（第1図参照。アルプス出版社製名古屋市区分詳細図1：8000には宅地化したこの地域に、かろうじて10ｍの等高線が示されている。）

昭和41年4月23日、地下鉄工事のため、南北に幅90㎝の溝を掘ったところ、縄文晩期土器包含層が露出したので、工事関係者（高速度鉄道建設部工事事務所東別院工区・名古屋市交通局技師土田紀生氏・奥村組、西松建設）の応援で2日間遺物採集に努めたものである。

遺物採集中には第2図のように幅3ｍの住居址らしい竪穴遺構が現われたが、名古屋市当局へ連絡しても予算がないとか、もっと土器が出なければ調査できないということで、土取りによって破壊されてしまったのである。

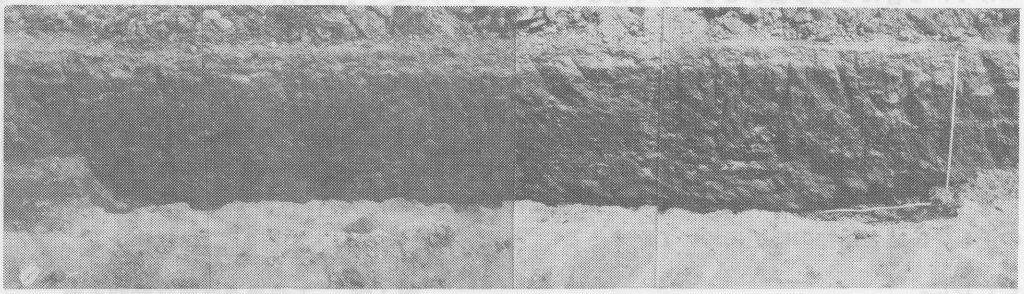
住居址らしい建構内黒土層からは、縄文晩期土器片40片と安山岩の石屑・チャート製のポイント様石器が採集できた。40片の土器片には口縁部が5個体・底部1個体がある。

3. 土器について

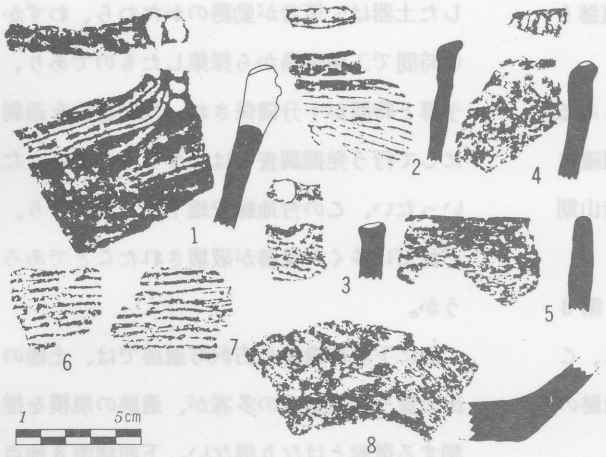
1・2・3・7の4地点から出土した土器のうち、第3地点の縄文晩期土器は、すでに名古屋考古学会会報No.15や名古屋市中区古沢町遺跡発掘調査報告書1・縄文時代編に発表したので土器の主なものを第4図に示し、本項では1・2・7の3地点の未発表の土器について述べてみたい。

第1地点出土土器（第3図2）出土した5片の土器片のうち、口縁部1個体を図示した。口縁部は、端部を指でなでつけて面取りを行い、器表面は貝殻腹縁による条痕で仕上げている。口縁端部には粘土のはみだしも見られる。

たゞ一片の土器であるが、これは樫王式土器の特徴をよく示しており、この台地縁にも古沢町（第1地点と高蔵貝塚の中間にある。）



第2図　第7地点の竪穴遺構



第３図　下前津遺跡第１地点（２）・第２地点（１）・第７地点（３－８）出土土器

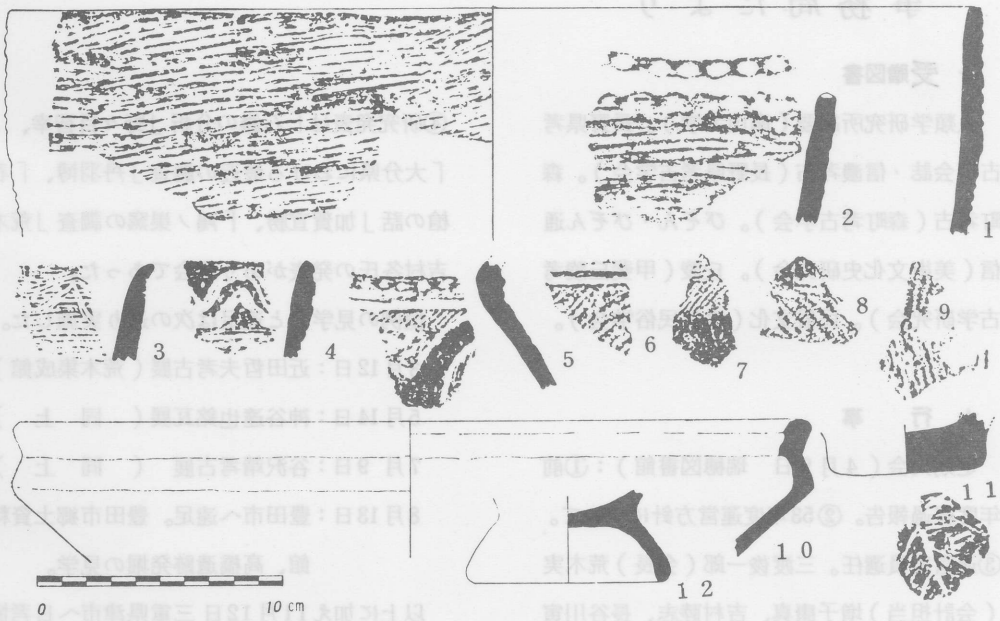
と同様に縄文晩期・樫王期の遺跡の存在が予想されるわけである。

第２地点出土土器（第３図１）は一片であるが、その形態は興味深いものがある。器形は波状口縁をもった鉢形を想定する。

肥厚した口縁端部外側には、半割竹管状具により２本の弧線と棒状具による２個の刺突を施し、さらに波状口縁の頂部に３個の押圧痕を見るものである。かって故吉田富夫氏が、この土器は大曲輪貝塚出土土器の中の一部に非常によく似ていると言われたことがある。宮滝式土器の伝統を強く残している土器である。

第７地点出土土器（第３図３～８）この地点の竪穴遺構内黒土から出土した土器片は40片あるが、そのなかで口縁部３個体・底部１個体そして胴部文様を図示した。

口縁部４は、わずかに波状口縁をなし、口縁端部に刻み目を施すもので、内面はよく研



第４図　下前津第３地点遺跡土器

磨されている。器表面には赤色顔料の痕跡もみる。

他に口縁部に押圧痕のあるもの(3)もある。土器は少量であり一型式の組成内容を明確に知ることはできないが、第3地点の稲荷山期に比定できるものであろう。

以上の如く、熱田台地北部東側には、第3地点の縄文晩期の稲荷山期の遺跡の他に、この遺跡に先行する遺跡あるいは後出の遺跡の存在が予想されるのである。

4. おわりに

下前津遺跡や古沢町遺跡のうち、縄文時代晩期の遺跡は小規模であるという論述に接することがある。

下前津遺跡1・2・3・7の4地点から出土した土器は、筆者が勤務のかたわら、わずかな時間で工事現場から採集したものであり、予算と時間が十分確保され、問題意識を過剰にして行う発掘調査とは異なるものであった。いったい、この台地縁で地下鉄工事により、どれだけ多くの遺跡が破壊されたことであろうか。

故に下前津遺跡や古沢町遺跡では、土器の出土量や地上散布の多寡が、遺跡の規模を推測する徴候とはなり得ない。下前津第3地点では表土はおろか、表土下黒土層にも縄文土器の存在は認められなかったが、黄色土層に接して縄文時代晩期のピット状遺構を発見したのである。

今後行われる周辺地域の土木工事には細心の注意が必要である。

事務局だより

★ 受贈図書

人類学研究所紀要(南山大学)。長野県考古学会誌・信濃考古(長野県考古学会)。森町考古(森町考古学会)。びぞん・びぞん通信(美術文化史研究会)。丘陵(甲斐丘陵考古学研究会)。民俗文化(滋賀民俗学会)。

★ 行　事

定期大会(4月9日　瑞穂図書館):①前年度経過報告。②53年度運営方針について。③運営委員選任。三渡俊一郎(会長)荒木実(会計担当)増子康真、吉村睦志、長谷川寅二、奥村一夫の各氏を選任した。

④研究発表は「石鏃の分析」野々目智幸、「大分県における最近の調査」丹羽博、「石槍の話」加賀宣勝、「鴻ノ巣窯の調査」荒木・吉村各氏の発表があり盛会であった。

恒例の見学会と遠足は次の通り実施した。

3月12日:近田哲夫考古展(荒木集成館)
5月14日:神谷達也銘瓦展(　同　上　)
7月 9日:谷沢靖考古展　(　同　上　)
8月13日:豊田市へ遠足。豊田市郷土資料館、高橋遺跡発掘の見学。

以上に加え11月12日三重県津市へ日考協の大会へ見学を兼ねての秋の遠足を行なう。